不定期刊行　　第 391 号　　2011.02.20

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩

## 中野西高等学校ワンダーフォーゲル部　高社山登山の記録

現在の部員は一年生２人で、入学早々、登山をやってみたいとやってきた貴重な存在だ。春は近くの里山を登り、県大会を経験し、夏は白馬大雪渓から不帰ノ嶮、五竜岳と歩いた。秋は北信五岳を楽しんだ。寒くなった１１月を機に、「春までオフだ」と放っておいた。

するとなんと、２人で１月に三沢山に登ったと言う。三沢山は学校からそう遠くないがけっこう高くかっこいい山だ(1604m)。私も前年の冬に三沢山に登ったが、雪の深さに苦しめられた。２人で行けるところまで自転車で行き、山頂に伸びる尾根に取りついて、膝までの雪をラッセルして登頂できたものの、疲れきって下山はあたりが薄暗くなる頃だったと言う。ツェルトやエレキも持たず、それは一つ間違えば遭難していたぞ、とその危険性を叱りながら、しかし内心はよくやったとうれしくなった。そして、ちゃんと教えてやらねばと雪山に連れ出すことにした。

高社山(1351m)には２月１２日(日)に登った。夜間瀬スキー場から、あえてゲレンデわきの樹林の深雪にルートをとり、汗をかきながら登った。上部の稜線では、ラッキーなことにカモシカとオコジョに出会えた。山頂はガスで眼下に広がる千曲川の素晴らしい眺めは見られなかったが、高校生と雪山を楽しむ喜びを味わった。２人は三沢山の方が大変でしたよ、と感想を言ってくれた。次は３月、霊仙寺山か根子岳を考えている。４月に部員が増えれば、県大会でも活躍させたい。(中野西高　福島伸一)

## 風雪の間隙をついて御岳に登る

２月１１日、１２日の両日、今夏予定している崑崙遠征の錬成合宿を御岳で行った。１１日は南岸低気圧の通過で大雪になるとの情報の中での、入山となった。メンバーは遠征隊の松田（県ヶ丘高)、久根（高遠高)、山内（大町山の会)、佐藤（信濃毎日新聞)、大西に加え、サポートとして入ってくれた沼田（王滝小中）さんの６名。湿っぽい雪の中、王滝村の御岳スキー場のゴンドラに乗り込む。それでも２２４０ｍのゴンドラ山頂駅付近では、さすがに雪もさらさらの粉雪である。久々の冬山フル装備（といってもたかが１泊）で、幕営予定地の遙拝所に向かう。ゲレンデを出てしばらく進んだところで輪かんを装着。しかし、雪の量は例年より１．５ｍは少ない。いつもなら頭だけしか覗いていない鳥居が、腰をかがめなくても通り抜けられる。北陸山陰では大雪だが、南では雪が少ないという今年の雪の特徴を如実に現している。

冬に王滝から御岳に登るときのＢＣはいつも遙拝所の下と決めている。ここは至極具合がいい場所で、知る人ぞ知る穴場。何が具合いいかって？それは行ってみれば分かる。

さて、雪は降っているが、今回の目的は「アクサイ山郡ヤズィックアグル峰遠征に向けての訓練」である。７月までに雪上での訓練の時期は限られているのだから、徒やおろそかにはできない。さっそく、２パーティを組んで、ロープワークの訓練を始めた。およそ４時間、スタカットクライミングと救助について一当たりさらった。食当は、サポートの沼田さんにお願いし、広いエスパースジャンボの中で、ゆったりとくつろぎながらキムチ鍋をつついた。

雪は一晩中やまなかったが、この快適なテン場では除雪の心配もいらない。朝、事情で山内君が下山。沼田さんは金剛童士までの同行とし、残ったメンバーで行けるところまで行こうと準備をする。雪は時折強くなりはするものの、行動ができないほどではない。８時３０分、テント場を出発し、ラッセルをしながら、樹林帯を抜け、８合目金剛童士の稜線に出たが、比較的風はない。１０時１０分、ここから下山するという沼田さんと別れ、輪かんをアイゼンに履き替えて上を目指す。青森からやって来て、昨夜上部に泊まったという二人組が降りてきて、ビックリ。視界もそれほど良くない上に、雪が降りしきる中、我々は高みを目指して登高開始。夏道を外れ、稜線に近いルートをとりながら、ひたすら上へ登る。雪はそれほど堅くなく、アイゼンも不安はない。富士見石、奥の院分岐と、見慣れた場所を確認しながら、登っていく。王滝頂上に着いたのが、１１時３５分。吹きだまりになった小屋は屋根まですっぽりと覆われている。幸い風もないので、高所の滞在時間を長くすることも意味があるだろうと考え、２０分ほど休んでから剣が峰へと向かう。１２時１５分、３０６７ｍの剣が峰に到着。上空は風が強いのだろう。時折雲が吹き飛ばされ、青空が覗いたりもする。低気圧が抜けて冬型が強まったはずだが、この程度の天気なら御の字である。文字通りの「御」岳だった。

頂上滞在時間はおよそ２０分。遠征に向けて、少しずつ身体を作っていく時期である。下って再び王滝頂上に着いたのが１２時４５分だから、１時間以上３０００ｍの高さに身を置くことができた。この時期の３０００ｍという高度の体験は有意義である。その意味では十分に成果のあがる錬成合宿となった。あとは駆け下りるように下り、「王滝の湯」で汗を流してミーティング。思いがけずラッキーな登山となった。

## 編集子のひとりごと

２月１２日の登山記録二つ。冒頭は、福島伸一先生からの報告だ。メールには「子どもたちにすてきな世界を伝えられるのは、私たちの仕事の魅力ですね。最近つくづくそう思います。」とのことばが添えられていた。「冒険」ができる子どもたちが今でもいることに感動した。確かに、一歩間違えば危険ではあるが、この感性を活かしながら、こんな魅力的な子どもたちとともに少しずつ一緒に歩いていければいい。（大西　記）